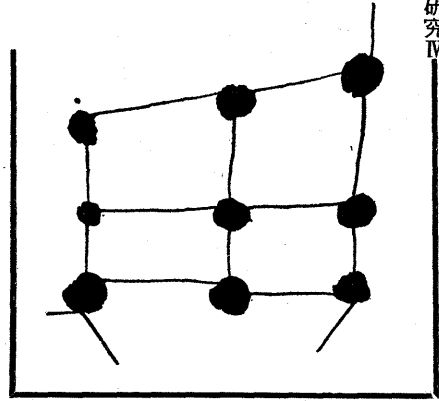


言葉と知能



〔上〕

村山 貞雄

1 始語期

言葉と知能の関係で特に問題になるのは、言葉をいはじめる時期である。

乳児は生れるや否やオギヤオギヤという叫声を発する。そして、生後一、二カ月頃から一年ぐらいまでは、意味のあるような、ないような、言葉とも叫び声ともつかぬことをいう時期がある。久保良英氏は、これを十の段階に分けている。(同氏著『児童心理学』)

このうち、第四段階までは、いわゆる反射時代 (reflex stage) に属するが、第四段階か第五段階以後は幼稚な片言時代であり、いわゆる喃語時代 (babbling stage) である。ムーアは、喃語時代を普通生後四カ月以後とする。

この喃語時代の後半、すなわち、子どもが六カ月乃至十カ月頃になると、おとなのいうことを無意味にまねをしているうちに言葉のなかに意味の意識が発生し、何らか

の意味をもった言葉をつかうようになるので、おとながその発語をきいていて一定の概念をくみとることができるようになる。そこで、始語期として、子どもなりにもしっかりした特定の概念をもつ言葉を言いはじめる時期を考へることが出来る。

しかし、始語期の調査は、このように喃語の時期があるために、始歩期にくらべると、定首期と同様に、困難であり、結果も不確実である。

この調査として、たとえば、ゲゼルは、生後四十週で一、二語言えるようになるという、ピュラーは始語期を、十、十一、十二カ月のころとする。また、愛育研究所の乳幼児精神発達検査によると、二語を話すのは、十、十一カ月が五十二パーセント、一歳零カ月児で八十二パーセントとなっている。また、村山が幼児の母親の回想をもとにして、約五千五百名の東京都内の中流以上の家庭の幼児の始語期について調査したところ、七十五パーセントにもっとも近い月は、一歳三カ月であった。

この調査において、男女差をみると、男子の方が、始語期がおくれていた。(表参照)

(一表) 始語期の性差

始語期	男子	女子
0 : 5	0.00	0.69
0 : 6	2.20	2.69
0 : 7	4.86	6.67
0 : 8	11.79	14.99
0 : 9	14.72	18.98
0 : 10	26.72	31.29
0 : 11	30.31	37.87
1 : 0	58.82	62.92
1 : 1	61.09	69.68
1 : 2	66.88	75.67
1 : 3	73.81	81.81
1 : 4	75.41	83.81
1 : 5	77.74	84.33
1 : 6	86.47	91.35
1 : 7	89.94	93.51
1 : 8	90.80	93.86
1 : 9	91.20	94.21
1 : 10	91.40	94.29
1 : 11	91.40	94.29
2 : 0	96.86	98.54
2 : 1	97.46	98.63
2 : 2	97.66	98.63
2 : 3	97.86	98.80
2 : 4	97.93	98.80
2 : 5	97.93	98.89
2 : 6	98.53	99.29
2 : 7	98.53	99.29
2 : 8	98.53	99.29
2 : 9	98.53	99.29
2 : 10	98.60	99.29
2 : 11	98.60	99.29
3 : 0	99.33	99.64
3 : 1	99.33	99.64
3 : 2	99.33	99.64
3 : 3	99.39	99.72
3 : 4	99.39	89.72
3 : 5	99.39	99.72
3 : 6	99.59	99.81
3 : 7	99.59	99.81
3 : 8	99.59	99.81
3 : 9	99.59	99.81
3 : 10	99.59	99.81
3 : 11	99.59	99.81
4才以上	99.99	100.07

2 始語の内容

始語の内容は、大体限定されている。アメリカ合衆国では、ダダとかママなどの言葉が多いようであるが、わが国でも、マリーとか、マンマなどが多い。

村山が病院その他ので、一歳未満の子どもに、観察法で有意語の内容を調査したところ、ブーブ(自動車)ワンワン(犬)ニャーニャー(猫)ザーザー(水、雨、風呂)ボーボー(火、風呂)のような同音を二回かさねた擬声語が多く、そのほか、マンマ、マー、ウマウマ(食物、母乳) ママ、またはアーチャン(母親) ババ(父親) バーまたはパン(パン) アッチーまたはチー(痛い、あつい) チョーチョコ(鳥、蝶、飛ぶもの) ハイチャ(さようなら) など、発音の内

容と意味が限定された数種の名詞にかぎられていた。

また村山が昭和三十年に、二歳以下の幼児をもつ母親について、想起法によって調査したところ、ウマウマやマンマ(ともに食物)という言葉が一番多く、ついで、マ

マーやチャーチャン(ともに母親)という言葉が多かった。(二表参照)

この解答のなかには、わからないとか、おぼえていないというものがかなりあったが、表はこれらのものを省いて、母親が解答した態度が自信がありそうに見受けられた百人についてあらわしたものである。

この表によると、意味内容では、食物が六十四パーセントで一番多く、ついで、母親が十五パーセントとなっている。

3 始語期と知能

ビュラーは、乳児期をチンパンジー時代であるとし、この乳児期は、チンパンジーではみられないもの、すなわち言葉の習得によって終末を告げるとする。

すなわち、始語期は、人間の子どもが、ともどもに歩いて来たチンパンジーの子どもと、訣別を告げようとするあたかも街道の辻にあたる要所であり、この要所に、早く達するか否かということは、子どもの知能の発達と関係のあることが一応考えられる。

すなわち、ティルマンは、始語期と知能を比較して、両者のあいだに積極的相関係のあることを示している。

また小野磐彦氏が発語期と知能の関係をしらべたところによると次頁の三表のようである。(久保良英編児童研究所紀要第六輯)

また、村山が愛育研究所に昭和二十七年四月から三十年四月までのあいだに、教養相談に来た幼児、六千四百四十九名について、始語期と知能指数の関係を調査したと

(二表)

母の確認した始語の内容

始語	意味	頻数
ウマ	食	29
マン	同	26
ママ	母	10
パパ	父	4
チャー	母	4
パン	親	4
お	親	4
ぱ	母	4
イン	お	4
ワ	ば	2
ブ	大	2
ウ	湯	2
ハ	馬	2
カ	葉	2
ア	母	1
パ	お	1
バ	親	1
ジ	便	1
オ	水	1
バ	母	1
ジ	父	1
ハ	花	1
ハ	ビス	1
ジ	ケツ	1
ア	な	1
ン	ら	1
ン	や	1
ン	父	1
計		100

(三表)

男		
人員	月数	知能
27	16.89	優
18	17.06	中
13	20.00	劣
58	17.64	平均

女		
人員	月数	知能
9	13.67	優
14	16.43	中
17	22.97	劣
40	18.59	平均

(四表) 始語期と知能指数との相関

検査名	性	N	T	P	4倍
鈴木ビネー式知能検査法 乳幼児精神発達検査	男	2656	- .31	.05	.08
	女	373	- .67		
鈴木ビネー式知能検査法 乳幼児精神発達検査	男	1501	- .32	.06	.10
	女	236	- .65		
鈴木ビネー式知能検査法 乳幼児精神発達検査	男	1155	- .28	.07	.12
	女	137	- .71		

ころ、四表のような結果を得た。
この表は、始語期の不確実な者、三千四百二十名を除いた結果である。この表によると、鈴木ビネー式知能検査を施行した幼児では、相関が存在するが低いと考えられ、乳幼児精神発達検査を施行した幼児では、相関関係が高いと考えられる。

両者のあいだに、このような相異が生じたのは乳幼児精神発達検査が主として作業検査であり、比較的知能の劣った者や、年齢の幼い者に多く施行されたことに原因す

ると推測される。すなわち、
一、前号で始歩期について述べたと同様に、始語期と知能のあいだには、普通児では因果関係が少なく、相関関係も低い。したがって、言葉の早い遅いはあまり問題にならない。しかし、精神薄弱児においては、因果関係が強く考えられ、相関係数が大きく出る。すなわち、普通児の始語期と、精薄児の始語期とのあいだに、異質の関係が認められる。この結果、知能遅滞者に比較的多く施行された乳幼児精神発達検査のほ

うに、相関係数が大きく出たと解される。

二、始語期と知能の相関関係は、被調査者の年齢がまだ平均始語期に近い時期において、一そう高い傾向が認められる。したがって、被検者の年齢が比較的低い乳幼児精神発達検査(乳幼児精神発達検査の被検者は幼児前期の者が多い)のほうが、相関係数が高く出たと解される。

三、始語期のおそい子どもは、その後遺状態が認められ、言葉が少なかったり、会話をきくらう者が多い。このため、多くが言語検査よりできている鈴木ビネー式では、主として作業問題よりなる乳幼児精神発達検査にくらべて、ハンディキャップが生じたと解される。

そこでこのものになった、表を示すと、
次頁の表のようである。

ただし、以上述べた調査は、教養相談に幼児が来たときに同道者にたずねて記入した者であるから、ちよと一年といふところに頻数が多くなっているなど、個々の信頼性は低い。そのうえ、前述のように、始語期そのものの解釈が困難である。

(五表) 鈴木ビネー式検査の結果と始語期 (男女計)

始語期	30 28	30 39	40 49	50 59	60 69	70 79	80 89	90 99	100 109	110 119	120 129	130 139	140 149	150 159	160 上計	類 数	%	累 積 %
0:4												1				1	0.04	0.04
0:5											5	2	2			9	0.34	0.38
0:6						1	2		6	14	15	10	3			51	1.92	2.30
0:7			1			1	6		10	29	19	17	6			89	3.35	5.65
0:8						1	3	11	21	60	57	28	16	2	1	206	7.53	13.18
0:9						1	3	5	29	17	25	5	2	3		90	3.39	16.57
0:10						1	7	19	36	103	83	42	24	5	1	321	12.09	28.65
0:11			1			3	2	2	38	25	33	17	11	1	1	131	4.93	33.58
1:0			1	5	1	1	21	43	68	233	201	84	40	16	3	717	27.00	60.58
1:1				1		2	4	2	4	59	17	12	10	4	2	112	4.22	64.80
1:2				2	1	3	10	12	45	57	17	7	7	1	1	155	5.84	70.63
1:3				2	3	5	7	40	57	40	10	18	3	1		176	6.63	77.26
1:4					1	3	15	9	15	9	10	4	5			47	1.77	79.03
1:5						1	3	21	9	5	2					41	1.54	80.57
1:6		1	1	1	5	8	9	16	25	84	21	31	9	1		212	7.98	88.55
1:7									25	7	2					77	2.90	91.45
1:8						1	3	3	6	45	5	1	1			17	0.64	92.09
1:9				1	1			2	2	5				1		10	0.38	92.47
1:10							1		2			1				4	0.15	92.62
1:11																0	0.00	92.62
2:0			3	4	6	7	15	19	26	32	8	7	2	1	1	131	4.93	97.55
2:1									1	1	8					10	0.38	97.93
2:2									1	1						3	0.11	98.04
2:3						1	2	1	1	1						5	0.19	98.23
2:4											1					1	0.04	98.27
2:5										1						1	0.04	98.31
2:6			2		2	1	1	4	3			1				14	0.53	98.83
2:7																0	0.00	98.83
2:8																0	0.00	98.83
2:9																0	0.00	98.83
2:10										1						1	0.04	98.87
2:11																0	0.00	98.87
3:0			2	2	2	4	2	1	1	1						15	0.56	99.44
3:1																0	0.00	99.44
3:2																0	0.00	99.44
3:3						1		1								2	0.08	99.51
3:4																0	0.00	99.51
3:5																0	0.00	99.51
3:6						1	2	1								4	0.15	99.66
4.0以上		1		1	2	2	1	1		2						9	0.34	99.99
計																2656	100.03	

たとえば、ある母親が、子どもが十一カ月でものを言いはじめたといったが、その答が何となく頼りなく感じられたので、「何という言葉を言いはじめましたか」と「何という言葉を言いはじめましたか」と「パパ」といふことを

「言ったのですか」とたずねたところ、「それはよく分からない」と答えたが、このような例が時折みられる。

4 言語障害と知能障害

いわゆる「口がおそい」幼児は、知能の

「これら」の幼児に、乳幼児精神発達検査か鈴木ビネー式知能検査をおこなった結果、その四十二パーセントは知能遅滞であり、

おくられていることが多い。知能遅滞児の父兄は、しばしば、自分の子どもがちえがおくられていると思わないで、言葉がおくられている(にすぎない)と思つて、その指導をうけに児童相談所にやってくる。すなわち、言語遅滞の主訴で来る者の多くは、精神薄弱児である。これを精薄性の構音障害といふ。

昭和二十五年四月から昭和三十年六月までに、愛育研究所に來た一万三百五十三名の幼児のうち、言語障害の主訴で教養相談に來た幼児は、二百八十二名であ

(六表) 乳幼児精神発達検査の結果を始語期(男女計)

始語期	20以下	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-99	100-109	110-119	120-129	130-139	140-149	150-159	類数	%	累積%
0:6										1	1	1				3	0.80	0.80
0:7											1					1	0.27	1.07
0:8			1		2				1	3	4	4				15	4.02	5.09
0:9				2	1	2				1	2	4				10	2.68	7.77
0:10				2	1	1	4		3	9	4	9				34	9.12	16.89
0:11				1	1				2	5	5	7				21	5.63	22.52
1:0			2	1	1	2	6	8	5	15	13	3	1		1	61	16.35	38.87
1:1				1	1			1		1	4	2				9	2.41	41.29
1:2			1			1	1	1	2	2	2			3		10	2.68	43.97
1:3				1	2	4	1	1	1	3	3			1		15	4.02	47.99
1:4							1	1	2	3	3					9	2.41	50.40
1:5				1					2					1		4	1.07	51.47
1:6			1	1	4	3	4	6	7	4	5	2				37	9.92	61.39
1:7											1					1	0.27	61.66
1:8			1	1			1									3	0.80	62.47
1:9				1	1		1	1								4	1.07	63.54
1:10			1				1			1						3	0.80	64.34
1:11					1	1	1									3	0.80	65.15
2:0		1	7	12	5	7	5	6	1	5	2	1				52	13.94	79.09
2:1						1										1	0.27	79.36
2:2				1	1						1					3	0.80	80.16
2:3				1	1	1										2	0.54	80.70
2:4				1	1	1										3	0.80	81.50
2:5				1	1											1	0.27	81.77
2:6			1	1	2	1										5	1.34	83.11
2:7																0	0.00	83.11
2:8							1		1							3	0.80	83.91
2:9					1	1										2	0.54	84.45
2:10			1	2	1		1									5	1.34	85.80
2:11																0	0.00	85.80
3:0		2	8	6	6	1	2	1								26	8.31	92.76
3:1																0	0.00	92.76
3:2																0	0.00	92.76
3:3																0	0.00	92.76
3:4			1													1	0.27	93.03
3:5																0	0.00	93.03
3:6				1	1		1									3	0.80	93.83
3:7			1	1												0	0.00	93.83
3:8																1	0.27	94.10
3:9																0	0.00	94.10
3:10																0	0.00	94.10
3:11					1											1	0.27	94.37
4:0以上	1	2	8	8	1		1									21	5.63	99.99
計																373	101.31	

約三十パーセントが、普通以下であった。一方、約二十パーセントが、普通以上であったが、百二十以上は四パーセント余にすぎなかった。(全体の調査では百二十以上が三十八・九パーセントであった。)

これを表に示すと、八表のようである。

これを主訴別に知能程度をみると、「口がきけない」や「言語障害がある」などが知能程度が低く、「話し方がおそい、のろい」や「発音が不明瞭である」「発音ができない」などが、そう低くなかった。また、わずかに二名にすぎなかったが、始語期がお

ろくいた。またこれらの幼児の或る者には、言語不用知能検査(現在標準化中)をしたところ、やはり低い結果があらわれた。

5 言語と知能の因果関係

知能と始語期とのあいだに相関関係があることが認められるが、両者のあいだに、

くれて、現在異常のない者の平均が、もっとも高かった。(九表参照)

言語障害と知能の調査結果を考察するばあい、知能検査の結果そのものに、言語障害による影響が入っていることは無視できない。しかし、これらの幼児のなかには、いわゆる聴啞児があり、「いちじるしい言語遅滞で、しかも聴覚や発音器官にまったく故障がないと医師がいう者」も多

(七表)

主 訴	人数	%
言語遲滞	83	29.43
口がおそい	43	16.31
言語がおくれている	38	13.47
発音が不明瞭である	29	10.28
口がきけない	22	7.80
言語障礙	17	6.03
言葉が言えない	12	4.26
言葉がはっきりしない	10	3.55
口をきかない	5	1.77
耳がきこえない	5	1.77
話ができない	2	0.71
単語だけしか言えない	2	0.71
発語期がおくれた	2	0.71
話をしない	1	0.36
息がつまって言葉が出てこない	1	0.36
言語幼稚	1	0.36
発音がおくれている	1	0.36
言語動作がのろい	1	0.36
発音ができない	1	0.36
言葉がでない	1	0.36
話すのがおそい	1	0.36
口が遅く思う様に発表できない	1	0.36
音は発する	1	0.36
発音が悪い	1	0.36
口数が少ない	1	0.36
合 = 194人	282	101.12
♀ = 88人		

どのような因果関係が存在するであろうか。聴啞の原因としてしばしば知能遲滞のほか、性格の異常や発音中枢の障礙などがあげられる。つきに、始語期と知能の因果関係と、それから無関係なばあいについて考察しよう。

知能の一因子として記憶があり、記憶力は乳幼児期に特にたいせつなものであるが、知能の高い子どもは記憶力が高く、そのために言葉をおぼえやすいことがまず考えられる。これに反して、知能の低い子どもは始語期がおくれるばかりでなく、単語が少なく、かつ、二語文や完全文が言いにくく片言が多くなりやすい。

また、知能の高い子どもは、外界に興味をもち、模倣しようとする意欲がさかんである。

たとえば、知能の高い幼児は、親の言葉を反復練習する、おむつ時代がさかんにあらわれる。

このほか、言葉をつかうためには、概念の生起が必要であり、さらに発音を調節して表現する能力が必要である。

概念とは、子どもが経験する意識の内容をまとめて抽象化することである。

知能の低い子どもは、このような意味の意識がなかなかつかめないために、始語期がおくれる。そのうえ、意味の意識が把握できるようにしても、そのまとめ方が、へたなために、語彙が発達せず、しばしばおとなとちがった概念を維持する。

言葉は、さらに直前に耳で聞いた発音や、以前に記憶した発音を口で正しく表現する能力が必要である。知能は低くなくて

もこの能力が欠けた者もあるが(この点が言葉と知能の相関を低くする)、知能が高い者は、しばしば模倣や工夫がすぐれており、知能の低い者は、口数が少なかつたり、発音が未熟になりやすい。いわゆる「耳がいい子」のなかには、しばしば知能指数がきわめて高い幼児がいる。

また、知能の高い者には表現しようとする興味の強い者が多く、知能の非常に低い者のなかには、表現しようという欲求がほとんど認められない者がある。

山下俊郎氏は、言葉のそなうべき条件として、発音ができること、その発音が言葉としての型をなすこと、意味の意識ができること、表現の欲求をもつことを挙げている。

(八表)

知能指数	人数	%
検査不能	20	7.09
計	20	7.09
精神薄弱	5	1.77
20~29	16	5.67
30~39	24	8.51
40~49	34	12.06
50~59	39	13.83
60~69	118	41.84
計	118	41.84
普通以下	30	10.64
70~79	35	12.41
80~89	22	7.80
90~99	87	30.85
計	87	30.85
普通以上	27	9.57
100~109	18	6.38
110~119	7	2.48
120~129	4	1.42
130~139	1	0.36
140~149	1	0.36
計	57	20.21

(九表) 言語障碍の種類と知能

計	言語障碍がある	耳が聞こえない	話し方がおそいのろい	発音が不明瞭である	発音がおくれている	発音ができない	口かすが少ない	口をきかない	口がきけない	言葉が幼稚である	言葉がおくれている	始語期がおくれた	主訴の種類	検査可
														人数
262	17	4	3	38	1	4	1	5	35	3	149	2	検査可	
	59.70	63.25	106.00	93.86	71.00	91.00	104.00	81.00	53.65	70.33	76.33	103.50	IQの平均	
	28.30	5.71	24.34	31.99	—	24.50	—	26.53	13.09	14.25	23.50	3.50	IQの検査不 備能者の 数	
20	0	0	0	1	0	0	0	1	3	1	14	0		

一方、言語に障害があっても、ただちに精神薄弱児と考えるわけにはいかない。すなわち、言葉と知能が無関係のばあいもある。

る。

このうち、もっともいぢるしいものは、聴覚障碍と生理的発音遅滞(聴力障碍以外の)である。また、知能の高い幼児や普通の幼児のなかにも、発音のしかたが特にへたな者や、発表しようという努力がいぢるしく少ない者がある。

聴力障碍は、障碍程度のひくい者は、四歳頃まで分かりにくい。その他の原因による生理的発音障碍は、満四歳頃になればなおる者も多いが、これについては来月号でくわしく述べよう。

以上のほかに、家系的な素質があるのではないかと考えられるものがある。このばあい、母親は最初は心配するが、二回めからは楽観的で、「お兄ちゃんも話しはじめがおそかったが、現在学校でよくできるので、この子もそのうちによくできるようなるでしょう」というようなことをよく言う。同胞だけでなく、たとえば、「お父ちゃんも四歳頃(数え歳)に話しはじめたから」というような言葉も時折きく。

たとえば、昭和三十年の末に児童相談

をしたS・Kは、二歳四カ月でまだ「アーチャン」とか「マンマ」と言える程度だったが、発達指数は九十六であった。母親の言葉によると、彼の姉(現在小学二年生)は、幼いとき彼よりも言葉がおくれていたが、(始語期三歳、現在クラスで五番以内である)といい、兄(六歳)も幼いとき彼と同様に言葉がおくれていたが(始語期二歳)今年知能検査をうけたら、百十六だったそうである。

このような例が時折みられるが、このようにことが反って、子どもが精薄性の構音障碍のばあい、両親がしばしば不当に楽観する原因となっていることは注意を要する。

× × × × × × × ×